

平成 29 年度研究協議会を終えて

校長 南 道子

研究主題「学ぶ意欲を持ち、追究していく生徒の育成」～「深い学び」の創造をめざして～として平成 29 年 11 月 17 日に本校で行われた研究協議会は、研究主題 3 年目の総仕上げとして、13 名の先生が公開授業を行った。今年度の事前登録者は昨年度の 280 名から予想を上回る 450 名あまりで、当日は、登録していない方々もみえたので受付は大変な忙しさであった。午前中の研究授業後、午後の研究協議会、その後、京都大学高等教育研究開発推進センター高等教育教授システム研究開発部門の松下佳代教授に講演をいただいた。

8 月の夏期研究会には、その松下佳代先生が参加して下さり活発な意見交換がなされた。松下先生は資質・能力の 3 つの柱として知・スキル・人間性をあげられた。確かな知識や技術（思考力、判断力、表現力）があっても人間性という重要な因子がそれを上手く使うかどうか肝心であると話され、点数をとる事が重視される現代に、それを実生活で使う事が大事であると話された。

更に昨今しきりに言われている deep learning は、1. deep learning, 2. deep understanding, 3. deep engagement がある事話され、確かに深く知るだけでなくそれを使って何か次の事柄を探求するという過程までも含まれる事、それを実際の授業でどのように生徒に会得させるのが課題であると感じた。

Deep learning の目標とするところは、「教科ならでは」の概念に生徒達を導き、また生涯にわたってどのような力をつけるか、どのような力をつけて個々の生徒の武器とするか、教科毎の特徴を学ばせるべきではないかななどの意見を言われ、教育の持つ重要な面を知る事となった。

一方的な知識の伝達の座学では、それでも生徒なり学生が学ぶ必要性について認識しているのであれば、それでも授業としてはうまくいっていた面があったのではないかと思う。しかし、この満ち足りた現代で、「学ぶ」という目的自体、持つ事が難しくなって来ているのではないだろうか。そんな時代には、授業のスキルを考え、工夫する必要があるのではないかと思う。

知識はしかし、個人の出世に使うのではなく、世の中のためや人のために使って初めて生きたものになるのである。単にその授業を受けて知識を記憶しても、それを実生活や社会で生かしていかないと何にもならないのは周知のごとくである。松下先生の言われる知・スキル・人間性の人間性という観点もその事を示しているものだと思う。これを学校生活に落としこんだものが active -deep learning ではないだろうか。理論としてもこの教育方法が確立し、授業者がそれらを会得した時に、より多くの社会に役立つ人間の育成が可能となると考えても良いと思う。

平成 30 年 2 月 26 日